Urban Centers; the Cradle of Popular Fiction
Jaroslav Průšek
ヤロスラフ・プルシェク「瓦子——民間文藝の揺籃期」

本論文は、宋代を中心とする「民間の文藝」(popular fiction)、特に話本をとりあげ、その初期の姿と發展を、講釋師と聽衆との有機的な關わりの方面からスポットをあてて考察したものである。

本論文の構成を簡單に紹介しておくと、本論文は冒頭の導入部以下、次のような章に分類されている。

○唐代における職業的講釋師の發生
○宋代の講釋師たち
○宗教的物語と歴史物語
○小說の主人公と環境
○物語の構成
○話本の作者たち
○講釋師の職業化
○戀愛物語
○裁判と冒險の物語
○怪奇と幻想の物語

民間における文藝、あるいはその當事者たちの興隆を論じる本論文が、その起源として敦煌出土のいわゆる「變文」をとりあげ、議論の最初においたのは妥當である。變文は、現存する限りでは、講唱文學の最古のものであり、後世に興起する民間の文藝は、形態の面でも內容のジャンルの面でも、變文からの影響を多く受けている。そのことは、すでに鄭振鐸『中國俗文學史』等の述べるところであり、著者がこの考えに從い、變文より敍述を始めるのは、方法的に正しいと言ってよい。

しかし、この變文に關して、本論文には本質的と思われる問題の考察が缺落している。

まず第一は、變文にとって本質的な要素であったと思われる變相圖が全く無視されている。民間の文藝は、ただ文字を媒介として享受されるものではなく、語り手の話とか、

それに加えて音樂とか、いわば舞臺裝置によってコミュニケートされるものである。變文においてしばしば出現する「且看……處」（しばらくは……のところを御覽あれ）等の表現から考え、變文の講唱には圖が附隨していたことは明白であり、実際にその遺物も發見されているのである。變文は繪ときの文學であり、換言すれば文と圖とが一體となって完成されるもので、變相圖をきり離しては變文の意義は論じ得ないであろう。「變文」の語を釋して、「奇妙な事件を述べた文」《texts (wen) relating strange incidents (pien)》（二六二頁）と言うのも、變相圖に對する考察の缺落から來るものであろう。

第二の問題は、變文講唱の際の、佛教のもつ諸要素の占める比重があまりに小さすぎることである。著者は、現存する變文の題材を分類するのにやぶさかでないが、その多數を占める佛教説話に取材するものが、寺院で民衆に講じられたことの意義に對してきわめて冷淡である。「維摩經講經變文」を「敍事詩」と規定する（二六二頁）のは、後世の話本に見えるジャンルの分類にあまりにも拘泥した考えではなかろうか。

冒頭の變文に關する敍述の中には上述の如き問題があり、以下の各章についても詳細に檢討すれば細かい問題があるが、本書評の體例より受ける紙數の制約もあり、ここには詳論し得ない。評者は今、本論文の中心テーマである、話本の講釋師たちに關する問題の、著者の議論を紹介並びに批評し、責を果たしたく思う。

本書「Studies in Chinese Literary Genres」の卷頭に附す Birch 氏の序文にも、本論文は「初期の講釋師の周邊の徹底的調査を提出」している、と述べられているように、本論文の主題は「説話人」、すなわち講釋師の活動の研究である。

宋代に盛行する話本の語り手たちについての記述は、幸いなことに、宋の羅燁『醉翁談錄』や周密『武林舊事』などに若干存在し、それを手がかりとして考えることができる。これらの書物は、ともすれば失われがちな民間文藝に關する資料の貴重な寶庫であり、著者もこれらの書を基礎

として敍述を進めている。

「宋代の講釋師たち」の章の冒頭で、著者は次のように述べている。

「宋代の講釋師は、次の二つの點によって特徴づけられる。一つは彼らの專門化であり、……（中略）……他の一つは彼らの大衆性である。」（二六四頁）

右の議論は著者の敍述の根幹をなすものであるので、特にこの點を考えてみよう。

話本の講釋師たちが、各々が演ずる題目の分野を分化させ、一種の同業組合とでも呼ぶべき組織を有していたことは、彼らがすでに完全な職業化を遂げていた證であり、この事実は民間文藝の歴史において重要な意味をもつ。このことは、たとえば孫楷第氏「中國短篇白話小說的發展與藝術上的特點」（『文藝報』四卷三期）においても强調されており、目あたらしい考えではないが、民間文學を、文字に定着された形からでなく、たとえば講釋とかの場における存在において考えようとする時、すなわち有機的に考えてゆこうとする時には、必らず最初に考えられるべき問題である。著者がこれを自らの論の中心にすえるのはきわめて正當である。

他の一つは、講釋師の大衆性であり、著者は特に、講釋師たちが民衆との直接的なふれあいの中で、政治的目的をもって活動していた、との考えを强調する。著者は、『醉翁談錄』卷一の「說國賊懷奸從佞、遣愚夫等輩生嗔、說忠臣負屈啣寃、鐵心腸也須下淚」という記述や、あるいは陶宗儀『輟耕錄』卷二十七の「胡仲彬聚衆」の話を論據として、講釋師たちの民衆に對する煽動力を述べる。また『武林舊事』卷六の諸色伎藝人、小說の項に見える講釋師たちの名前の中に、「酒李一郎」とか「棗兒徐榮」とかの、愛稱を冠せられた名前が存在することにより、講釋師たちの大衆性の證とする。

以上の二例において、前者ではやや斷章取義の感があり、後者では、演史の項に列せられる「許貢士」とか「陳進士」「張解元」等科擧に關する名稱が附せられる意味の考察がないのは片手落ちである、など評者には全面的に從い得ない點もある。

ともあれ、著者が提示した、講釋師と民衆との有機的な關係の考察は、今まであまり論じられなかった點であり、鋭い、新しい觀點である、と言わねばならない。

本論文の後半部は、具體的作品を、演史・公案等の分類に從ってわけ、分析を加え初期民間文藝の內容について敍述している。作品の分析においては、主人公の地位・環境等が充分考慮され、そこから語り手・聽き手雙方が關わっていた當時の社會像を描こうとしている。この試みは有意義なものであるが、ここでは却って演じられた狀況の考察が稀薄になってしまっているのが惜しまれる。

本論文は四〇ページにわたる長論文で、密度も相當に濃い力作である。作品の列擧と平板な解說に終始しやすい文學史の領域の中で、作者と演者と民衆との有機的な關係、そしてその時代思潮を論じた有意義な論文である。興味のある讀者は是非一讀されんことを請う。

（京都大學　阿辻哲次）